天草版『エソポのハブラス』の助数詞と助数詞を含む数詞

── 国字本『伊曽保物語』・天草版『平家物語』との比較を通して ──

濱千代　いづみ

キーワード：エソポのハブラス　助数詞　数詞　伊曽保物語　天草版『平家物語』

1　はじめに

本研究の目的は、天草版『エソポのハブラス』の助数詞そのもの、及び助数詞を含む数詞に関して、国字本『伊曽保物語』・天草版『平家物語』と比較し、その特色を把握することである。

日本語で数を表すとき、「数を表す部分」と「数えられる対象の種類を表す語尾」とを合わせた形で示すのが一般的である。「ひとくち・ふたり・三回・四枚」の「ひと・ふた・三・四」が「数を表す部分」で、「くち・り・回・枚」が「数えられる対象の種類を表す語尾」である。本稿では合わせた形を数詞と呼び、「数えられる対象の種類を表す語尾」を助数詞と呼ぶことにする。日本語の特徴の一つに、この助数詞が、対象となる人や物の形状や性質などに対応して複雑に使い分けられているという事象がある。固有の日本語の数詞は本来非常に素朴単純であった。それが中国語の数詞の影響と日本文献の書記上の必要から、日本語の助数詞を含む数詞は多様になったと考えられる。しかし、現代は簡略化に向かっている。〈注1〉

濱千代（2006）で天草版『平家物語』と『平家物語』〈高野本〉の助数詞、及び助数詞を含む数詞の語彙を比較した。考察の方向は2点あった。

○　助数詞の簡略化が起こっているか。起こっている場合、どのような助数詞の意味で起こっているか。

○　作品成立の背景と助数詞、及び助数詞を含む数詞の使用との間にどのような関連があるのか。

この結果を次のようにまとめて示した。

a　数値の上で〈天草版〉の助数詞を含む数詞の語彙が減少していることが明白になった。

b　意味による分類の観点で比較した結果、次のことが判明した。

① 〈天草版〉で用いられている助数詞は「ぐわち（月）」「より（度）」「たり（人）」の三種を除いて〈高野本〉でも用いられている。〔尺度〕〔時間〕〔頻度〕〔性質単一〕の意味分類に属するものの種類が多い。この共通する助数詞は、軍や歴史を記述する『平家物語』という作品の性格を反映すると同時に、戦乱の続いた中世の日本語において使われていたものである。

② 〈天草版〉のみで用いられている助数詞は室町時代末期に行われていた読み（「ぐわち（月）」）、原拠本に存在した表現（「より（度）」）を反映している。

③ 〈高野本〉にある助数詞が〈天草版〉にない原因として、〈天草版〉に該当部分が存しないことと、〈高野本〉で事物が列挙してあったり、詳細な説明がなされていたりする部分が〈天草版〉ではまとめて述べてあったり、簡略な説明になっていたりすることとがあげられる。これは古典の『平家物語』を抜き書き的に編集した点に由来する。また、〈天草版〉が外国語としての日本語と、日本の風俗習慣とを初めて学習する者へ配慮して編集してある点に深く関係している。現代でも用いる「しやく（尺）」や、仏教関係の「ちやくしゆ（揆手）」「ゆじゆん（由旬）」「き（基）」「ぢく（軸）」といった〈高野本〉でも用例の少ない助数詞は見られなくなった。

c 〈天草版〉と〈高野本〉とを比較した時に現れた助数詞を含む数詞の減少、言い換えると助数詞の簡略化は、双方の作成の目的、編集方針を反映した現象であることを立証した。

天草版『平家物語』と『平家物語』〈高野本〉との比較では、助数詞の簡略化と作品の編集方針を分離して考察することが困難であった。今回、天草版『エソポのハブラス』・国字本『伊曽保物語』を調査の対象にしたことで、中世末期から江戸初期にかけての助数詞、及び助数詞を含む数詞の特色を一層明らかにしたいと考える。

計量に利用した文献は次のものである。

ア 『エソポのハブラス本文と総索引』

イ 『仮名草子伊曽保物語用語索引』

ウ 『天草版平家物語語彙用例総索引』

これらは共通の方針と基準の下に作成してあるわけではないので、単語の認定の基準を一致させるようにして計量した。

天草版『エソポのハブラス』及び天草版『平家物語』の本文は、文献ア・ウ、及び『キリシタン版エソポのハブラス私注』に基づき、漢字仮名交じりに直して引用する。国字

本『伊曽保物語』の本文は日本古典文学大系『仮名草子集』に依拠し、くり返し符号を文字に、旧字体の漢字を新字体に直して引用する。『仮名草子集』の底本の本文を確認する場合、『古活字本伊曽保物語　国立国会図書館所蔵本影印』を用いる。それぞれ次の略称を用いる。

〈エソポ〉〈エ〉・・・天草版『エソポのハブラス』

〈伊曽保〉〈伊〉・・・国字本『伊曽保物語』

〈ヘイケ〉〈ヘ〉・・・天草版『平家物語』

『平家物語』〈高野本〉の助数詞、及び助数詞を含む数詞に触れることもあるが、その場合、略称は〈高野本〉〈高〉を用い、本文の引用は新日本古典文学大系『平家物語』上下に依拠し、くり返し符号を文字に、旧字体の漢字を新字体に直す。底本の本文は『高野本平家物語　東京大学国語研究室蔵』で確認する。

「数を表す部分」に続く言葉を、助数詞とみるか名詞とみるか判断に迷う場合がしばしばある。本稿では峰岸明（1966)に示されている助数詞の処理方法を参考にし、次のような区分を行う。

【助数詞の範囲】

〔一〕事物の名称が、そのものの数量を示すために、本来の意義・用法のまま基数詞と複合して、一種の数詞として用いられる場合は、自立的用法の名詞と見做す。

〔二〕事物の名称そのもののほかに、その数量を示す特定の語があって、これが基数詞と熟合してその事物の数量・性質・形状などを表示する場合、助数詞本来の用法とする。

助数詞の分類の基準を意味の異同によって次のように定める。

【助数詞の分類】

（一）量を測る単位

①人為的に特定の単位を設定したもの

〔尺度〕〔容積〕〔量目〕〔時間〕に細かく分類する。

②集合体や容器の名称を単位名としたもの

〔集合体〕〔集団〕〔容器〕に細かく分類する。

（二）数を数える単位

①頻度・種類・順序などを単位名としたもの

〔頻度〕〔重なり〕〔種類〕〔区画〕〔位階〕〔順序〕に細かく分類する。

②性質・形状などを単位名としたもの

a　単一体を単位とする場合　〔性質単一〕とする。

b　集合体を単位とする場合　〔性質集合〕とする。

（その他）和語につく「つ」、漢語名詞の前にある「か」、数量の倍数を表す「倍」

2　助数詞と助数詞を含む数詞の概要

2．1　天草版『エソポのハブラス』の助数詞の概要

〈エソポ〉から異なり語数で５８語、延べ語数で１５０語の助数詞を含む語を抽出した。延べ語数を異なり語数で割ると２．５９になる。同じ語が平均して２．５９回出現していることになる。

〈エソポ〉のすべての助数詞を【助数詞の分類】に従って整理すると次のようである。

【〈エソポ〉の助数詞の分類】

（一）量を測る単位

①人為的に特定の単位を設定したもの・・・計１１種

〔尺度〕すん（寸）、ま（間）・・・２種

〔容積〕こく（石）・・・１種

〔量目〕りやう（両）・・・１種

〔時間〕とき（時）、げつ（月）、つき（月）、ねん（年）、か（日）、にち（日）、や（夜）・・・７種

②集合体や容器の名称を単位名としたもの・・・計２種

〔集合体〕は（把）・・・１種

〔集団〕・・・０種

〔容器〕はい（杯）・・・１種

（二）数を数える単位

①頻度・種類・順序などを単位名としたもの・・・計５種

〔頻度〕たび（度）、ど（度）、かなで（奏）、くち（口）・・・４種

〔重なり〕・・・０種

〔種類〕・・・０種

〔区画〕・・・０種

〔位階〕・・・０種

〔順序〕くわん１（巻）・・・１種

②性質・形状などを単位名としたもの・・・計１４種

ａ　単一体を単位とする場合・・・１４種

〔性質単一〕ひき（匹)、くわん（貫)、ほん（本)、にん（人)、り（人)、しよ（所)、ところ（所)、くわん２（巻)、はう（方)、えだ（肢)、きよく（曲)、し（紙)、じ（字)、ふし（節）

ｂ　集合体を単位とする場合・・・０種

〔性質集合〕

（その他）・・・計３種

か（箇)、つ（箇・個)、ばい（倍）

上記を単純に合計すると３５種になる。が、「くわん（巻)」が２類で用いられているので、これを同じ助数詞と見做す。この結果、〈エソポ〉から３４の異なる助数詞を抽出した。

２．２　国字本『伊曽保物語』の助数詞の概要

〈伊曽保〉から異なり語数で５９語、延べ語数で２２０語の助数詞を含む語を抽出した。延べ語数を異なり語数で割ると３．７３になる。同じ語が平均して３．７３回出現していることになる。

〈伊曽保〉のすべての助数詞を【助数詞の分類】に従って整理すると次のようである。

【〈伊曽保〉の助数詞の分類】

（一）量を測る単位

①人為的に特定の単位を設定したもの・・・計８種

〔尺度〕すん（寸)、しやく（尺）・・・２種

〔容積〕こく（石）・・・１種

〔量目〕りやう（両）・・・１種

〔時間〕つき（月)、ねん（年)、にち（日)、や（夜）・・・４種

②集合体や容器の名称を単位名としたもの・・・計０種

〔集合体〕・・・０種

〔集団〕・・・０種

〔容器〕・・・０種

（二）数を数える単位

①頻度・種類・順序などを単位名としたもの・・・計４種

〔頻度〕たび（度)、ど（度)、くち（口）・・・３種

〔重なり〕・・・０種

〔種類〕しゅ（種）・・・１種

〔区画〕・・・０種

〔位階〕・・・０種

〔順序〕・・・０種

②性質・形状などを単位名としたもの・・・計１１種

ａ　単一体を単位とする場合・・・１１種

〔性質単一〕ひき（匹)、くわん（貫)、くわんめ（貫目)、ほん（本)、にん（人)、
り（人)、ところ（所)、たい（体)、さう（艘)、はう（方)、
ふし（節）

ｂ　集合体を単位とする場合・・・０種

〔性質集合〕

（その他）・・・計３種

か（箇)、つ（箇・個)、ばい（倍）

上記を単純に合計すると２６種になる。〈エソポ〉のように２類で用いられているものはない。この結果、〈伊曽保〉から２６の異なる助数詞を抽出した。

２．３　天草版『平家物語』の助数詞の概要

〈ヘイケ〉から異なり語数で４９８語、延べ語数で１３６５語の助数詞を含む語を抽出した。[注2] 延べ語数を異なり語数で割ると２．７４になる。同じ語が平均して２．７４回出現していることになる。

〈ヘイケ〉のすべての助数詞を【助数詞の分類】に従って整理すると次のようである。

【〈ヘイケ〉の助数詞の分類】

（一）量を測る単位

①人為的に特定の単位を設定したもの・・・計２５種

〔尺度〕たん（段)、ちやう（町)、り（里)、ひろ（尋)、けん（間)、すん（寸)、
ぢやう（丈)、ま（間)、そく（束）・・・９種

〔容積〕こく（石）・・・１種

〔量目〕・・・0種

〔時間〕とき（時)、せ（世)、だい（代)、よ（代・世)、ぐわち（月)、
ぐわつ（月)、さい（歳)、とせ（年)、ねん（年)、か（日)、じつ（日)、
にち（日)、ひ（日)、や（夜)、よ（夜）・・・１５種

②集合体や容器の名称を単位名としたもの・・・計３種

〔集合体〕ふさ（房）・・・１種

〔集団〕つら（行)、むら（群）・・・２種

〔容器〕・・・0種

（二）数を数える単位

①頻度・種類・順序などを単位名としたもの・・・計１７種

〔頻度〕より（度)、かたな（刀)、たび（度)、ど（度)、へん（返・遍)、
じふ（入)、ばん１（番)、こゑ（声）・・・８種

〔重なり〕へ（重)、ぢゆう（重）・・・２種

〔種類〕しゅ（種）・・・１種

〔区画〕でう１（条）・・・１種

〔位階〕ほん（品)、ゐ（位）・・・２種

〔順序〕ばん２（番)、なん（男)、らう（郎）・・・３種

②性質・形状などを単位名としたもの・・・計２５種

ａ　単一体を単位とする場合・・・２２種

〔性質単一〕しゅ（首)、ひき（匹)、まい（枚)、き（騎)、くわん（貫)、
ほん（本)、う（宇)、かう（行)、たん（端)、でう２（条)、
ながれ（流)、たり（人)、にん（人)、り（人)、しよ（所)、
ところ（所)、たい（体)、さう（艘)、くわん（巻)、はう（方)、
くわ（顆)、すぢ（筋）

ｂ　集合体を単位とする場合・・・３種

〔性質集合〕ぶ（部)、かさね（重)、りやう（領）

（その他）・・・計２種

か（箇)、つ（箇・個）

上記を単純に合計すると７２種になる。が、「ばん（番)」「でう（条)」が２類で用いられているので、これを同じ助数詞と見做す。この結果、〈ヘイケ〉から７０の異なる助数詞を抽出した。

２．４　３作品の比較から見る全体像

〈エソポ〉と〈ヘイケ〉の助数詞を含む数詞の異なり語数・延べ語数は、〈エソポ〉が５８語・１５０語、〈ヘイケ〉が４９８語・１３６５語である。〈エソポ〉の助数詞を含む数詞の規模は〈ヘイケ〉と比較すると、異なり語数で１１．６％、延べ語数で１１．０％になる。筆者は本研究と同じ文献を用いて〈エソポ〉と〈ヘイケ〉の自立語全部の語彙を計量した。その異なり語数・延べ語数は〈エソポ〉が２９０４語・１１７４９語、〈ヘイケ〉が７４１６語・４６７８８語である。〈エソポ〉の自立語の語彙の規模は〈ヘイケ〉と比較すると、異なり語数で３９．２％、延べ語数で２５．１％になる。〈注３〉

表１　〈エソポ〉〈ヘイケ〉の異なり語数・延べ語数の比較

		〈エソポ〉	〈ヘイケ〉	〈エソポ〉／〈ヘイケ〉
助数詞を含む数詞	異なり語数	５８語	４９８語	１１．６％
	延べ語数	１５０語	１３６５語	１１．０％
自立語全部	異なり語数	２９０４語	７４１６語	３９．２％
	延べ語数	１１７４９語	４６７８８語	２５．１％

〈エソポ〉の助数詞を含む数詞の規模を〈ヘイケ〉と比較した数値は、〈エソポ〉の自立語の語彙の規模を〈ヘイケ〉と比較した数値に比べてはるかに小さい。以上から、次のことが数値の上で明白になった。

ｉ　〈エソポ〉と〈ヘイケ〉とは室町時代末期の話し言葉で書かれた日本語教材という共通点を持っているが、〈エソポ〉は〈ヘイケ〉と比較して助数詞を含む数詞の使用が少ない。

意味別の助数詞の種類の合計は、〈エソポ〉が３５、〈伊曽保〉が２６、〈ヘイケ〉が７２である。〈エソポ〉は〈伊曽保〉の１．３倍、〈ヘイケ〉の半分になる。そして、３作品の助数詞を含む数詞の異なり語数・延べ語数は次のようであった。

表２　３作品の助数詞を含む数詞の異なり語数・延べ語数

	〈エソポ〉	〈伊曽保〉	〈ヘイケ〉
異なり語数	５８語	５９語	４９８語
延べ語数	１５０語	２２０語	１３６５語
延べ語数／異なり語数	２．５９	３．７３	２．７４

〈エソポ〉と〈伊曽保〉とは共通の祖本としての文語本が存したであろうと考えられるが、〈エソポ〉の下巻に相当する部分は収録寓話の異同が大きい。[注4] 遠藤潤一氏はこの部分に関して、〈エソポ〉が共通の祖本によらず、１６世紀ヨーロッパにおいて標準的で権威あるラテン語本によったとしている。[注5] 表２から次の点が確認できる。

ii　助数詞を含む数詞の語彙の規模は〈伊曽保〉の方が〈エソポ〉より大きい。しかし、助数詞の種類では〈エソポ〉の方がバラエティに富んでいる。

３　意味による分類の観点から見た助数詞の特色

〈エソポ〉〈伊曽保〉〈ヘイケ〉の全部の助数詞を意味による分類の観点で比較することで、その特色を把握しよう。３作品にあるもの、２作品にあるもの、１作品にしかないものに分け、整理して示すと次のようになる。

（A）３作品にあるもの

（一）量を測る単位

①人為的に特定の単位を設定したもの・・・計５種

〔尺度〕すん（寸）・・・１種

〔容積〕こく（石）・・・１種

〔時間〕ねん（年）、にち（日）、や（夜）・・・３種

（二）数を数える単位

①頻度・種類・順序などを単位名としたもの・・・計２種

〔頻度〕たび（度）、ど（度）・・・２種

②性質・形状などを単位名としたもの・・・計７種

ａ　単一体を単位とする場合・・・７種

〔性質単一〕ひき（匹）、くわん（貫）、ほん（本）、にん（人）、り（人）、ところ（所）、はう（方）

（その他）・・・計２種

か（箇）、つ（箇・個）

（B）〈エソポ〉〈伊曽保〉にあって〈ヘイケ〉にないもの

（一）量を測る単位

①人為的に特定の単位を設定したもの・・・計２種

〔量目〕りやう（両）・・・１種

〔時間〕つき（月）・・・１種

（二）数を数える単位

①頻度・種類・順序などを単位名としたもの・・・計１種

〔頻度〕くち（口）・・・１種

②性質・形状などを単位名としたもの・・・計１種

ａ　単一体を単位とする場合・・・１種

〔性質単一〕ふし（節）

（その他）・・・計１種

ばい（倍）

（C）〈エソポ〉〈ヘイケ〉にあって〈伊曽保〉にないもの

（一）量を測る単位

①人為的に特定の単位を設定したもの・・・計３種

〔尺度〕ま（間）・・・１種

〔時間〕とき（時）、か（日）・・・２種

（二）数を数える単位

②性質・形状などを単位名としたもの・・・計２種

ａ　単一体を単位とする場合・・・２種

〔性質単一〕しよ（所）、くわん２（巻）

（D）〈伊曽保〉〈ヘイケ〉にあって〈エソポ〉にないもの

（二）数を数える単位

①頻度・種類・順序などを単位名としたもの・・・計１種

〔種類〕しゆ（種）・・・１種

②性質・形状などを単位名としたもの・・・計２種

a　単一体を単位とする場合・・・２種

〔性質単一〕たい（体）、さう（艘）

（E）〈エソボ〉にのみあるもの

（一）量を測る単位

①人為的に特定の単位を設定したもの・・・計１種

〔時間〕げつ（月）・・・１種

②集合体や容器の名称を単位名としたもの・・・計２種

〔集合体〕は（把）・・・１種

〔容器〕はい（杯）・・・１種

（二）数を数える単位

①頻度・種類・順序などを単位名としたもの・・・計２種

〔頻度〕かなで（奏）・・・１種

〔順序〕くわん１（巻）・・・１種

②性質・形状などを単位名としたもの・・・計４種

a　単一体を単位とする場合・・・４種

〔性質単一〕えだ（肢）、きよく（曲）、し（紙）、じ（字）

（F）〈伊曽保〉にのみあるもの

（一）量を測る単位

①人為的に特定の単位を設定したもの・・・計１種

〔尺度〕しやく（尺）・・・１種

②性質・形状などを単位名としたもの・・・計１種

a　単一体を単位とする場合・・・１種

〔性質単一〕くわんめ（貫目）

（G）〈ヘイケ〉にのみあるもの

（一）量を測る単位

①人為的に特定の単位を設定したもの・・・計１７種

〔尺度〕たん（段）、ちやう（町）、り（里）、ひろ（尋）、けん（間）、ぢやう（丈）、そく（束）・・・７種

〔時間〕せ（世）、だい（代）、よ（代・世）、ぐわち（月）、ぐわつ（月）、さい（歳）、

とせ（年）、じつ（日）、ひ（日）、よ（夜）・・・１０種

②集合体や容器の名称を単位名としたもの・・・計３種

〔集合体〕ふさ（房）・・・１種

〔集団〕つら（行）、むら（群）・・・２種

（二）数を数える単位

①頻度・種類・順序などを単位名としたもの・・・計１４種

〔頻度〕より（度）、かたな（刀）、へん（返・遍）、じふ（入）、ばん１（番）、こゑ（声）・・・６種

〔重なり〕へ（重）、ぢゆう（重）・・・２種

〔区画〕でう１（条）・・・１種

〔位階〕ほん（品）、ゐ（位）・・・２種

〔順序〕ばん２（番）、なん（男）、らう（郎）・・・３種

②性質・形状などを単位名としたもの・・・計１４種

ａ　単一体を単位とする場合・・・１１種

〔性質単一〕しゆ（首）、まい（枚）、き（騎）、う（宇）、かう（行）、たん（端）、でう２（条）、ながれ（流）、たり（人）、くわ（顆）、すぢ（筋）

ｂ　集合体を単位とする場合・・・３種

〔性質集合〕ぶ（部）、かさね（重）、りやう（領）

表３　〈エソポ〉〈伊曽保〉〈ヘイケ〉の助数詞の種類

助数詞の分類			〈エソポ〉	〈伊曽保〉	〈ヘイケ〉	(A) 3作品	(B) 〈エ〉〈伊〉	(C) 〈エ〉〈ヘ〉	(D) 〈伊〉〈ヘ〉	(E) 〈エ〉のみ	(F) 〈伊〉のみ	(G) 〈ヘ〉のみ
量を測る単位	人為的に特定の単位を設定したもの	尺度	2	2	9	1	0	1	0	0	1	7
		容積	1	1	1	1	0	0	0	0	0	0
		量目	1	1	0	0	1	0	0	0	0	0
		時間	7	4	15	3	1	2	0	1	0	10
	集合体や容器の名称を単位名としたもの	集合体	1	0	1	0	0	0	0	1	0	1
		集団	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
		容器	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0

数を数える単位	頻度・種類・順序などを単位名としたもの	頻度	4	3	8	2	1	0	0	1	0	6
		重なり	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
		種類	0	1	1	0	0	0	1	0	0	0
		区画	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1
		位階	0	0	2	0	0	0	0	0	0	2
		順序	1	0	3	0	0	0	0	1	0	3
	性質・形状などを単位名としたもの	性質単一	14	11	22	7	1	2	2	4	1	11
		性質集合	0	0	3	0	0	0	0	0	0	3
その他		か、つ、ばい	3	3	2	2	1	0	0	0	0	0
合計			35	26	72	16	5	5	3	9	2	48

以上から次の点が指摘できる。

i　各作品で助数詞の種類が多いのは〔時間〕〔頻度〕〔性質単一〕の意味分類である。3作品で共通に見られる（A）も同様の様相を呈している。

ii　〈エソポ〉〈伊曽保〉と比較して〈ヘイケ〉で多いのは〔尺度〕の意味分類である。それは〈ヘイケ〉のみに見られる（G）にもよく現れている。

3.1　3作品にあるもの

（A）3作品にあるものは16種類である。これらは室町時代から江戸時代にかけて一般に用いられていた助数詞である。その中には作品により用法の異なるもの、限られているものがある。

（1）「すん（寸）」　使用度数〈エ〉1、〈伊〉2、〈ヘ〉4

〈エソポ〉〈伊曽保〉では成句の中で用いられる。用例の後の括弧内にページ・行を示すことにする。

(1) 天下の善悪は舌三寸のさへづるにあるといふことがござる。しかれば、天下・国家の安否（ぶ）も舌に任することなれば、（〈エ〉416-7）

(2) 夫世中のありさまを見るに、舌三寸のさえづりをもつて、現世は安穏にして、（〈伊〉367-4）

(3) 三寸の舌のさえづりをもつて、五尺の身を損じ候も、(〈伊〉367-10)

「すん（寸)」を含む数詞はイソップが主人のシャントに獣の舌を調達した理由を述べる会話に出現する。イソップは先に珍しい物を、次に世間第一の悪しき物を手に入れるように言われた。(1)と(2)は対応する部分である。「舌三寸のさへづる（り)」は、口先だけの物言いで内実の伴わない意味で用いる成句である。また、「三寸の舌のさへづりをもつて、五尺の身を損ず」は、当時ことわざとして用いられた。

これに対して〈ヘイケ〉では実際の長さを表す場合に用いている。

(4)（与一が)扇の要から上一寸ばかりおいてひっぷっと射切ったれば、(〈ヘ〉337-9)

(5)（長兵衛は）太刀の切っ先五寸ばかり打ち折って捨ててのけた。(〈ヘ〉112-2)

（2）「ひき（匹)」　使用度数〈エ〉１０、〈伊〉１６、〈ヘ〉９

〈エソポ〉で「ひき（匹)」を付けて数える対象は獣・馬・羊の子・驢馬・狼・狐の6類にわたる。また、〈伊曽保〉では獣・羊・牝馬・犬・野牛・驢馬・狼・牛・えのこの9類に及ぶ。

(6) この四匹が同心して、山中を駆けめぐるに、獣一匹行きやうたれば、(〈エ〉446-4)

(7)（狼が牧羊犬に)「御邊(ごへん)はなにとて痩せ給ふぞ。我に羊を一疋たべ。(〈伊〉443-2)

(6)の四匹は、この話の題目に掲げてある「獅子と犬と狼と豹」の4種類の異なる獣を表している。(7)では狼から犬への会話の中で、羊を数えるのに用いている。つまり、獣から獣への会話の中で、獣を数えるのに用いている。〈エソポ〉と〈伊曽保〉の「ひき（匹)」は色々な獣を数える単位である。

これに対して〈ヘイケ〉では対象がすべて馬である。

(8)（競は）宗盛から下された煖廷(なんれう)にうち乗って、乗り替へ一匹引かせて、

(〈ヘ〉119-15)

(9) 義経は鞍置き馬を二匹追ひ落とされたれば、一匹は足うち折って転び落ち、一匹は相違なう平家の城の後ろに落ち着き、(〈ヘ〉271-8,9,9)

〈ヘイケ〉の「ひき（匹)」は鞍置き馬・乗り替えの馬というように、戦闘に用いるが人の乗っていない馬を数える助数詞である。武士の乗っている場合は「き（騎)」を用いる。

なお、大型の獣を数えるのに、現代では「とう（頭)」を単位に用いるが、3作品に「とう（頭)」の例は見られない。

（3）「ほん（本)」　使用度数〈エ〉４、〈伊〉３、〈ヘ〉６

「ほん（本)」は細長い物を数える単位である。〈エソポ〉では柱3・斧の柄1、〈伊

曽保〉では柱２・植木１を対象に数える時、「ほん（本）」が付いている。

（10）　ある杣人（そまびと）、山に入（い）って、「斧の柄を一本下されば、一期（いちご）の御恩と存ぜうずる」と、（〈エ〉486-24）

（11）　天これを憐ませられて、柱を一本下さるれば、（〈エ〉454-10）

（12）　この巻物を一本のうへ木には、必花実あり。（〈伊〉403-2）

(10)に対応する話が〈伊曽保〉には存在しない。(11)に対応する部分は「柱を一つ」(〈伊〉415-10）とある。また、〈エソポ〉の「柱ただ一本」（〈エ〉440-9)、「一本の柱とは」（〈エ〉440-15）に、〈伊曽保〉の「柱一本」（〈伊〉396-4)、「一本の柱とは」（〈伊〉396-7）がそれぞれ対応する。(12)は〈伊曽保〉の中「十　いそほ物のたとへを引きける事」にあるが、これに相当する部分が〈エソポ〉で「読誦の人へ対して書す」に移され、「植木には」の形で「一本の」が付いていない。

〈ヘイケ〉では卒塔婆５・柱１を対象に用いている。

（13）（康頼が卒塔婆を）千本ながら海に入れたれば、そのうち一本安芸の国の厳島の渚に打ち上げたところで、（〈ヘ〉66-22,22）

長い棒状のものを数えるのなら、矢を対象とする時に用いてもいいはずである。しかし、〈ヘイケ〉で矢は「つ」を単位とする場合が多く、「すぢ（筋）」を単位とする場合もあるが、「ほん（本）」は見られない。

（14）（有国は）矢を七つ八つほど射立てられて、立死に死んでござる。（〈ヘ〉169-22）

（15）（兼平は）残った八筋の矢を差し詰め、引き詰め散々に射る。（〈ヘ〉247-13）

現代に比べ、「ほん（本）」を付けて表す対象の範囲が狭いようである。

以上をまとめると次のようである。

ⅰ　３作品で共通に見られる助数詞は、室町時代から江戸時代にかけて一般に用いられたものである。

ⅱ　「すん（寸）」は〈エソポ〉〈伊曽保〉で成句の中で、〈ヘイケ〉で実際の長さを表す場合に用いる。寓話と軍記という作品の素材の相違が反映されている。

ⅲ　「ひき（匹）」は〈エソポ〉〈伊曽保〉で色々な獣を数えるのに、〈ヘイケ〉で人の乗っていない馬を数えるのに用いる。寓話と軍記という作品の素材の相違が反映されている。現代の用法と比較した場合、「ひき（匹）」で表す対象の範囲が広い。

ⅳ　「ほん（本）」は〈エソポ〉で柱・斧の柄、〈伊曽保〉で柱・植木、〈ヘイケ〉で卒塔婆・柱を対象にする。現代の用法と比較した場合、表す対象の範囲が狭い。

3．2　〈エソポ〉〈伊曽保〉にあって〈ヘイケ〉にないもの

（B）〈エソポ〉〈伊曽保〉にあって〈ヘイケ〉にないものは5種類である。そのうち、「りやう（両）」「つき（月）」は〈高野本〉にあるが、「くち（口）」「ふし（節）」「ばい（倍）」は〈高野本〉でも見られない。

（1）「りやう（両）」　使用度数〈エ〉1、〈伊〉1、〈ヘ〉0

「りやう（両）」は〈エソポ〉でも〈伊曽保〉でも金子の単位として用いられている。

（16）　ある貪欲（どんよく）な者、一跡をことごとく沽却して、金子百両を求め、人も行かぬ所に穴を掘って、深う隠せども、（〈エ〉478-13）

（17）　かの人怒って、仏像を取って打ち砕く所に、その仏のみぐしの中に金数百両有けり。（〈伊〉449-14）

〈ヘイケ〉には使用例がないが、〈高野本〉には12例見られ、金・砂金・綿の量目を示している。

（18）（平重盛は）金を三千五百両召しよせて、「汝は大正直の者であんなれば、五百両をば汝にたぶ。三千両を宋朝へ渡し、育王山（いわうさん）へまいらせて、千両を僧にひき、二千両をば御門へまいらせ、田代を育王山へ申よせて、我後世とぶらはせよ」とぞの給ひける。（〈高〉上177-5~7）

巻第三「金渡」の章段に集中して7例見られる。この章段は新日本古典文学大系で1ページ分という短い分量で、平重盛が中国の臨済宗の育王山に金を寄進したことを記している。〈ヘイケ〉にはない章段である。巻第三「公卿揃」の始めに「砂金（しやきん）一千両、富士の綿二千両」（〈高〉上149-1）、同「行隆之沙汰」に「百疋百両」（〈高〉上189-2）、巻第八「征夷将軍院宣」に「沙金百両」（〈高〉下87-7）とあるが、これらの章段も〈ヘイケ〉にはない。〈高野本〉の12例のうち11例は〈ヘイケ〉に訳出されなかった章段で用いられている。そして、残り1例は以仁王の笛の由緒を述べる部分に見られ、〈ヘイケ〉ではその部分が削除されている。

（19）　此宮は、蟬折・小枝と聞えし漢竹の笛を、ふたつもたせ給へり。かの蟬折と申は、昔鳥羽院の御時、こがねを千両、宋朝の御門へをくらせ給ひたりければ、・・・蟬折とはつけられたれ。・・・いまをかぎりとやおぼしめされけん、金堂の弥勒に参らッさせおはします。（〈高〉237-16）

（19）に対応する〈ヘイケ〉の本文は次のようである。

（20）　宮は蟬折れ、小枝といふ漢竹の笛を二つもたせられたが、その蟬折れをば、金堂の弥勒へ今生の祈祷のためか、または後生のためにか寄進させられて

（〈へ〉124-11~15）

「りやう（両）」は原拠とした『平家物語』に使われていたが、〈ヘイケ〉に編集する際に訳出されない章段にあった。

（2）「つき（月）」　使用度数〈エ〉2、〈伊〉2、〈へ〉0

「つき（月）」は〈エソポ〉で音読みの数字の後に続けて用いられる。

「十二月（つき）」（〈エ〉440-16）、「六（ろく）か月（つき）前」（〈エ〉443-18）

〈伊曽保〉の「つき」の読みは校注者の判断によるもので、影印（80-11）（95-7）に振り仮名はない。

「十二か月」（〈伊〉396-8）、「六か月」（〈伊〉403-13）

校注者も指摘しているように、日葡辞書の「イッカ（一箇）」の項目に、「音読みの数字・か・つき」の形が示してある。[注6]

Icca.　イッカ（一箇）　Nen（年），tçuqi（月），xo（所），cocu（国）の語を伴って，年，月，場所，寺院，国を数える言い方。例，Iccanen.（一箇年）一年.　Iccatçuqi.（一箇月）一か月，など.

〈伊曽保〉も「音読みの数字・か・つき」の形と考えられる。現代語で「音読みの数字・か」の次には音読みの「げつ」が来る。「げつ」は〈エソポ〉のみに「数月（すげつ）」（〈エ〉435-11）の1例が存し、「か」を含まない語形である。

〈ヘイケ〉には使用例がないが、〈高野本〉には3例見られる。

(21)（通盛から北の方へ）「・・・あはれなんしにてあれかし。うきよのわすれがたみにも思ひをくばかり。さていく月ほどになるやらん。心ちはいかがあるやらん。いつとなき波の上、舟のうちのすまひなれば、しづかに身身とならん時もいかがはせん」（〈高〉下184-12）

(22)　うき世の忘れ形見はあらうず。ただしいつとない波の上、船の内の住まひなれば、身身とならうも心くるしい（〈へ〉280-24~281-2）

〈高野本〉の(21)で「いく月」は、通盛が具体的な事柄を述べて北の方のからだを気遣う部分に見られる。〈ヘイケ〉の(22)ではその部分が抜け落ちている。また、鬼界が島へ流された康頼が、帰郷を願って詠んだ祝詞の中に「月のならび十月二月（とふた）」（〈高〉上125-11）とあり、一語に二度出てくる。〈ヘイケ〉ではこの祝詞の部分が削除されている。〈高野本〉の「つき」の読みは校注者の判断によるものであるが、「十」「二」に影印で振り仮名があり、「月」は「つき」と読んでさしつかえないであろう。

「つき（月）」は室町末期から江戸初期にかけて「音読みの数字・（か）・つき」の形で

用いられた。「つき（月）」は原拠とした『平家物語』で「訓読みの数字または不定の語・つき」の形で使われていたが、〈ヘイケ〉に編集する際に訳出されない部分にあった。

（3）「くち（口）」　使用度数〈エ〉4、〈伊〉1、〈ヘ〉0

〈エソポ〉〈伊曽保〉の各1例は、イソップの主人で学者のシャントが、海の水を一口で飲むという難題を掛けられた場面に出てくる。

(23)　シャント沈酔して居らるる所へ人が来て、「大海の潮を一口に飲み尽さるる道があらうか」と問ふに、（〈エ〉417-18）

(24)　しやんとおどろきさはぎ、「こは誠に侍るや。なにとしてあの潮を二口共飲み候べき。（〈伊〉369-13）

〈エソポ〉の残り3例は「一口のパン」(485-7)、「(犬が狐を) 一口に咬み殺いた」(477-12)、「(獅子王が驢馬を) 一口にくらひ殺さうとする」(482-17) である。〈エソポ〉〈伊曽保〉の「くち（口）」は飲食・動物の攻撃という行為における口に入れる回数を表している。〈ヘイケ〉で「くち（口）」が見られない現象には、〈エソポ〉〈伊曽保〉には飲食の行為や情景がしばしば描写されるが、〈ヘイケ〉にはその描写が極めて少ないという作品の内容の相違が関係していよう。

（4）「ふし（節）」　使用度数〈エ〉1、〈伊〉2、〈ヘ〉0

「ふし（節）」は〈エソポ〉〈伊曽保〉で歌の曲節を数える単位として用いている。

(25)　(狐が鶏に)「・・・ことには一曲の妙な声が世に隠れない。一節承らうずるために参ったれば、ここにおりゃれ」と（〈エ〉477-3）

(26)　(狐が烏に)「・・・あはれ一節聞かまほしうこそ侍れ」と申ければ、烏此儀を誠と心得て、「さらば、声を出さん」とて、口をはたけけるひまに、終に肉を落としぬ。（〈伊〉412-3）

(27)　(狐が鶏に)「・・・あはれ一節歌ひ候へかし。（〈伊〉434-10）

(25)(27)は互いに同話が存在しない。(26)に対応する〈エソポ〉の本文は次のようである。

(28)　(狐が烏に)「・・・一曲聞かさせられいかし」と言へば、烏このことを聞いて、真かと心得て、一曲あげうと口を開くとともに、肉をば落いた。（〈エ〉450-17~19）

〈伊曽保〉の「一節」「声を出さん」に〈エソポ〉の「一曲」「一曲あげう」が対応し、「きよく（曲）」を用いた表現になっている。

「ひとふし」は『源氏物語』『徒然草』などにも見られるが、ひとつの出来事、ひとつ

の点という意味に解せる。〈注7〉

(29) この比の歌は、一ふしをかしく言ひかなへたりと見ゆるはあれど、

(徒然草101-1)

歌の曲節を数える単位の「ふし（節)」は新しい用法といえよう。日葡辞書にヒトフシの見出しがあり、次のように説明されている。

Fitofuxi. ヒトフシ（一節） 竹，葦やこれと同類の物の節，指の関節，Catçuuo（鰹）と呼ばれるcombalamazの干したもの〔鰹節〕，また，歌の節などの数え方.

「ふし（節)」のほかに歌を数える単位として、〈エソポ〉に「きよく（曲)」「かなで(奏)」がある。これについて後述する。

（5）「ばい（倍)」 使用度数〈エ〉2、〈伊〉2、〈ヘ〉0

「ばい（倍)」は〈エソポ〉〈伊曽保〉で「一倍」の語形で用いられ、「一倍まし」と同意で二倍の意味を表す。

(30) （犬は肉の大きさが）己が含んだよりも、一倍大きなれば、影とは知らいで、含んだを捨てて、(〈エ〉445-17)

(31) 「理のこうずるは非の一倍」というて、(〈エ〉480-21)

(32) （御門が二人の人に）「・・・後に望まん物は、前の望みに、一倍をあたへん」との給へば、欲心なる者は、「なに事にてもあれ、一倍取らん」と思ふによ（っ）て（〈伊〉455-7,8)

〈エソポ〉の(30)に対して〈伊曽保〉に同話が存するが、「ある犬、・・・『わがくはゆる所の肉より大きなる』と心得て、これを捨てて」(〈伊〉405-9）とあり「一倍」を用いない。(31)(32)には相互に同話が存しない。「一倍」には数量・程度のはなはだしい意味を表す副詞的用法もあり、『日本国語大辞典』『時代別国語大辞典室町時代編』で(30)の例を引用している。

以上をまとめると次のようである。

i 〈エソポ〉〈伊曽保〉にあって〈ヘイケ〉にないもののうち〈高野本〉にある助数詞は、原拠の『平家物語』を〈ヘイケ〉に編集する際に訳出されない章段や部分にあったものである。

ii 「つき（月)」は室町末期から江戸初期にかけて「音読みの数字・（か）・つき」の形で用いられた。

ⅲ　〈ヘイケ〉で「くち（口）」が見られない現象には、〈エソポ〉〈伊曽保〉には飲食の行為や情景がしばしば描写されるが、〈ヘイケ〉にはその描写が極めて少ないという作品の内容の相違が関係していよう。

ⅳ　歌の曲節を数える単位の「ふし（節）」は新しい用法といえる。

ⅴ　「ばい（倍）」は〈エソポ〉〈伊曽保〉「一倍」の語形で用いられ、二倍の意味を表す。現代語の副詞的用法にとれるものもある。

3．3　〈エソポ〉〈ヘイケ〉にあって〈伊曽保〉にないもの

（C）〈エソポ〉〈ヘイケ〉にあって〈伊曽保〉にないものは5種類である。それらの使用度数を示すと、次のようである。

ま（間）・・・〈エ〉1、〈ヘ〉5

とき（時）・・・〈エ〉1、〈ヘ〉1　　か（日）・・・〈エ〉1、〈ヘ〉6 5

しよ（所）・・・〈エ〉2、〈ヘ〉6　　くわん2（巻）・・・〈エ〉1、〈ヘ〉1

〈エソポ〉の使用度数はどれも少ない。下巻に集中し、〈伊曽保〉に「くわん2（巻）」に対応する部分のみがあり、その他は同話が存しない。

(33)（炭焼が洗濯人へ）家も広う、間々も多いを見て、「・・・この一間（ひとま）を我にお貸しゃれ」と言へば、（〈エ〉473-12）

(34)（洗濯人が炭焼へ）「余（み）が一七日（ひとなぬか）の間洗ひ清めうほどの物を、そなたの一時（ひととき）召されうことをもって汚さうずれば、少しの間もかなふまじい」と。

（〈エ〉473-15,16）

(35) 子ども一所に集まり居た時（〈エ〉491-18）

(36) 諸鳥一所に集まって評議して言ふは、（〈エ〉492-13）

(37) それから一巻（いちくわん）の書を作って帝へこれを奉ったれば、（〈エ〉431-10）

(33)(34)の例は「炭焼と洗濯人の事」における問いかけと回答である。「ま（間）」は部屋を数える単位として用いられている。(37)に対応する〈伊曽保〉の本文は「一七日にこの書を集め、奉る。」(378-1) とあり、「一巻の書」が「この書」になっている。なお、ここに「一七日」があるが、読み方に関しては校注者により「いつしちにち」の振り仮名が付され、頭注に根拠として「一七日（ixxichinichi）ノ聴聞」（ロ氏大文典）が示してある。

目をひくのは〈ヘイケ〉の「か（日）」の使用度数6 5である。合戦の記録という『平家物語』が持っている作品の性格を受け継いで〈ヘイケ〉でも多用されている。これに対し、〈エソポ〉〈伊曽保〉では日日を指定する必要はなかった。

以上をまとめると、次のようである。

i　〈エソポ〉〈ヘイケ〉にあって〈伊曽保〉にないものは、〈エソポ〉の使用度数が少ない。〈エソポ〉の下巻に集中し、〈伊曽保〉に対応する話が存在しない。

ii　「か（日）」は合戦の記録という作品の性格を受け継いで〈ヘイケ〉で多用された。

3．4　〈伊曽保〉〈ヘイケ〉にあって〈エソポ〉にないもの

（D）〈伊曽保〉〈ヘイケ〉にあって〈エソポ〉にないものは3種である。それらの使用度数を示すと、次のようである。

しゆ（種）・・・〈伊〉1、〈へ〉7

たい（体）・・・〈伊〉2、〈へ〉1　　さう（艘）・・・〈伊〉1、〈へ〉17

すべて〈エソポ〉に対応する話が存しない章に出現する。〈伊曽保〉ではイソップが上の十二でサモの地に着き、サモでの話題が十三から十六で述べられ、その後諸国行脚にでかけるが、〈エソポ〉には十三から十六に相当する話が載っていない。「肴一種」(383-11)、「天人二体」(384-3)「天朝二体」(384-5) はそこでの用例である。「たい（体)」は天人を数えるのに用いている。また、〈伊曽保〉の中「四　伊曽保帝王に答る物語の事」に相当する話も〈エソポ〉に存しない。「小舟一艘」(395-7) はそこでの用例である。

〈ヘイケ〉の「しゆ（種)」は7例全部が「三種(じゅ)の神器」の語形で固定している。「たい（体)」は「一千一体の仏」(4-9) とあり、仏を数えるのに用いている。また、「さう(艘)」が合戦の記録という性格を受け継いで多用されている。

(38)　源氏方から船を五百艘ほど押し出いて、そのまま取り回さうとしたれば、また平家方からも船を千余艘で漕ぎ出いて、(〈へ〉209-11,13)

以上をまとめると、次のようである。

i　〈伊曽保〉〈ヘイケ〉にあって〈エソポ〉にないものは、〈伊曽保〉の使用度数が少ない。〈エソポ〉に対応する話が存在しない。

ii　「さう（艘)」は合戦の記録という作品の性格を受け継いで〈ヘイケ〉で多用された。

3．5　〈エソポ〉にのみあるもの

（E）〈エソポ〉にのみあるものは9種である。それらの使用度数は次のようである。

「げつ（月)」1、「は（把)」1、「はい（杯)」2、「かなで（奏)」1、
「くわん1（巻)」1、「えだ（肢)」2、「きよく（曲)」4、「し（紙)」1、
「じ（字)」1

まず、「かなで（奏）」「きよく（曲）」について取り上げる。この2種は音楽の節や楽曲を数える単位である。

(39)（野牛が狼に）「・・・最後に一奏舞うて死なうず。一曲添声に預かれ」と
（〈エ〉481-21）

3例の「きよく（曲）」は「ふし（節）」の項で引用したが、再度示す。

(25)（狐が鶏に）「・・・ことには一曲の妙な声が世に隠れない。一節承らうずるために参ったれば、ここにおりゃれ」と（〈エ〉477-3）

(28)（狐が烏に）「・・・一曲聞かさせられいかし」と言へば、烏このことを聞いて、真かと心得て、一曲あげうと口を開くとともに、肉をば落いた。
（〈エ〉450-17~19）

(28)は〈伊曽保〉の(26)に対応する部分で、先の「一曲」が「一節」（〈伊〉412-3）に、後の「一曲あげう」が「声を出さん」（〈伊〉412-4）に相当する。(39)(25)は〈伊曽保〉に同話が存在しない。「ふし（節）」は〈エソポ〉〈伊曽保〉両方で歌の曲節を数える単位として用いられ、それは新しい用法といえた。「きよく（曲）」も〈エソポ〉で声に出して歌う数の単位として用いられている。

ところで、「きよく（曲）」は〈高野本〉に7例存し、琵琶の楽曲を数えるのに用いる。

(40)（影のごとくなるものが御門に）「是は昔、貞敏に三曲つたへ候し、大唐の琵琶の博士、廉妾夫と申す者で候が、三曲のうち秘曲を一曲のこせるによって、
（〈高〉下54-8,9,9）

この「曲」は楽曲の意味の名詞としての扱いも可能であるが、助数詞として処理した。〈高野本〉に対応する部分が〈ヘイケ〉に1例しかなく、その部分は〈高野本〉の「彼三曲」（下216-1）が〈ヘイケ〉で「琵琶の秘曲」（298-20）と表現が変わっている。

日葡辞書にイッキョク、ヒトカナデの見出しがあり、それぞれ次のように説明されている。

Icqioku.　イッキョク（一曲）　舞ったり，弾奏したり，歌ったり，物語ったりなどする時の優美さやよい音色のところ．

Fitocanade.　ヒトカナデ（一奏で）　歌を伴った一踊り．

(39)の例にある「添声」については次のように説明されている。

Soyegoye.　ソエゴエ（添声）　演劇〔能〕の際に，演技者が声がかれているとか，声が出せないとかする場合に，謡うのを援助すること．

〈エソポ〉の「かなで（奏）」「きよく（曲）」、そして〈エソポ〉〈伊曽保〉の「ふし（節）」は、どの用例も声に出して歌う行為と深く関係している。小林千草（2008）は、

〈ヘイケ〉に関して「ハビアンは能の語りのリズムを念頭に入れて、原拠本たる平家物語を室町口語訳していった」点を指摘した。〈ヘイケ〉と合冊された〈エソポ〉の口語化に、ハビアンがどの程度関与したか明瞭にいえないが、〈エソポ〉に助数詞の面から能の語りの素養の反映を見ることができる。

「は（把）」「くわん１（巻）」の２種が出現する話や部分は〈伊曽保〉に存在しない。「は（把）」は下巻「百姓と子どもの事」に出現する。

(41)（木の枝を）一把づつ面々に渡いたれば（〈エ〉492-1）

「くわん１（巻）」は作品の構成を表す題目にある。

(42)　エソポが作り物語の下巻（〈エ〉469-19）

「げつ（月）」「はい（杯）」「えだ（肢）」「し（紙）」「じ（字）」が出現する話は〈伊曽保〉に存在するが、該当部分の表現が異なっている。

(43) 元より数月（す）棺の中に籠り居たことなれば（〈エ〉435-11）

(44) 久しく籠居せし故（〈伊〉388-9）

(45)　なま温い湯を一盃大茶碗に持って来て（〈エ〉411-16）

(46)　一盃づつ引き受け引き受け飲むに（〈エ〉412-6）

(47)　ま一肢は我にくれい（〈エ〉446-10）

(48)　ま一肢をば我にくれい（〈エ〉446-13）

(49)　肢一つ得させよ（〈伊〉406-5）

(50)　エソポ一紙を調えて（〈エ〉440-24）

(51)　いそ保懐より小文一つ取りいだし、（〈伊〉396-14）

(52)　その故は、ここにまた石に五字書いてござる。それといふは、オ、コ、ミ、テ、ワとあった。（〈エ〉420-4）

(53) そのゆへは此文字にあらはれ、（〈伊〉371-15）

〈エソポ〉の(43)に〈伊曽保〉の(44)が対応する。〈エソポ〉の(45)(46)は〈伊曽保〉で上「第三　柿を吐却すること」に相当するが、〈伊曽保〉では簡易な表現になっており、対応箇所を取り出せない。(47)(48)は〈エソポ〉で「獅子と犬と狼と豹との事」、(49)は〈伊曽保〉で中「十四　師子王・羊・牛・野牛の事」にある。動物が異なるが内容の対応する話での使用例である。(47)に対応する〈伊曽保〉の本文に脱落が考えられる。(48)に(49)が対応するが、〈伊曽保〉は「つ」を用いた表現になっている。同様の表現は「肢一つ」（〈エ〉446-8)、「ま一つの肢」（〈エ〉446-14）のように〈エソポ〉にも見られ、それらは〈伊曽保〉で「肢一つ」（〈伊〉406-3)、「今一つの相残る肢」（〈伊〉406-5）と

なっている。日葡辞書にヒトエダの見出しがあり、次のように説明されている。

Fitoyeda　ヒトエダ（一枝・一肢）　木の枝や花の枝、豚、鹿その他動物の四肢の部分を数える言い方。また、薙刀を数えるのにも使われる。

〈エソポ〉の(50)に〈伊曽保〉の(51)が、〈エソポ〉の(52)に〈伊曽保〉の(53)が対応する。ともに表現が異なっている。

以上をまとめると、次のようである。

ⅰ　〈エソポ〉に助数詞の面から能の語りの素養の反映を見ることができる。

ⅱ　〈エソポ〉にのみある助数詞は、〈伊曽保〉に対応する話が存在しないか、存在しても対応する部分の表現が異なっているために出現しないものである。

3．6　〈伊曽保〉にのみあるもの

（F）〈伊曽保〉にのみあるものは2種類である。それらの使用度数は次のようである。

「しやく（尺）」2、「くわんめ（貫目）」9

（1）　「しやく（尺）」　使用度数〈伊〉2

「しやく（尺）」1例は上「第五　けだものの舌の事」でイソップの答えの中に現れる。〈エソポ〉に対応する話は存するが、表現が異なっている。

(54)　しばらく世間の悪事を案じ候に、是禍門也。三寸の舌のさえづりをもつて、五尺の身を損じ候も、みな舌ゆへのしわざにて候はずや（〈伊〉367-10）

(55)　舌はこれ禍の門なりと申す諺がござれば、これに過ぎた悪しい物はござるまじい（〈エ〉416-14）

あと1例は上「十五　長者と他国の商人の事」に「一尺四方の箱一つ」（382-12）の形で現れるが、この話は〈エソポ〉に存しない。

「しやく（尺）」は〈高野本〉で11例見られる。漢音の「せき（尺）」も3例ある。しかし、その全用例に該当する部分が〈ヘイケ〉に存しない。

「しやく（尺）」が〈伊曽保〉にのみあるのは〈エソポ〉対応する話が存在しなかったり、存在しても表現が異なっていたりして出現しないためである。

（2）　くわんめ（貫目）　使用度数〈伊〉9

「くわんめ（貫目）」は「くわん（貫）」と同じく、貨幣を数える単位である。〈伊曽保〉

では銀子の単位として三貫目、四貫目、十貫目が用いられている。上「十三　商人かねをおとす公事の事」(379~380) で、落とした銀子が三貫目か四貫目かで裁判になり、イソップがみごとに裁いてみせる。

(56)　ある商人(あきびと)、さんにおゐて三貫目の銀子(ぎんす)をおとすによつて、札(ふだ)を立ててこれをもとむ。・・・ある者是を拾ふ。・・・主(ぬし)（＝商人）俄に欲念おこつて褒美のかねを難渋せしめんがため、「わがかねすでに四貫目ありき。持ちきたれるところは三貫目なり。・・・」・・・二人ながら糺明の庭にまかり出る。・・・かの主、誓断をもつて「四貫目ありき」と云。かの者は、「三貫目ありき」と云。

(〈伊〉379-2,10,11,15,15)

また、上「十五　長者と他国の商人の事」(382~383) で、十貫目の銀子を長者に預けた商人が、イソップの知恵を借りて無事に銀子を取り戻す。

(57)　ある時、片田舎の商人、銀子十貫目持ち来(きたり)て、・・・長者たやすく預かりける。・・・長者あらがひて云(いはく)、「我汝が銀を預かる事なし。・・・」・・・かの玉を預からんがために、・・・もとの銀子をあたへてけり。そのゆへは、「此箱の内の明珠、十貫目の南鐐よりそくばくまさるべし」と思ふによつてなり。

(〈伊〉382-4,383-5)

これらの話は〈エソポ〉に存在しない。「くわんめ（貫目)」という単位が〈エソポ〉に見られないのは、金銭の争いを扱った上記の話を〈エソポ〉が採用しなかったことによる。

ここで「くわん（貫)」に触れておこう。「くわん（貫)」は3作品にあるが、使用度数は〈エ〉1、〈伊〉7、〈へ〉2で、〈伊曽保〉の多さが目を引く。

〈エソポ〉の「ネテナボ帝王、エソポに御不審の条々。」で、未だかつて見聞かぬものは何かという、エジプトの学者から出された難題に、イソップが答える部分に出てくる。(58)と(59)とは対応する部分である。

(58)　その理はリセロ帝王から借らせられた、三十万貫の借状であった。(〈エ〉441-2)

(59)　「それりくうるすといふけれしやの帝王より、三十万貫を借り候所、実正(じつしやう)明白なり」とありければ、(〈伊〉397-2)

〈伊曽保〉の中「六　さぶらひ鵜鷹にすく事」(397~398) で、イソップはエジプトの臣下の鵜飼・鷹狩りを、経費と利益という点で諌める。

(60)　住人安じて云「其費(つゐ)へいくばくぞや」侍答(さぶらひ)云、「毎年百貫あてなり」といふ。・・・「その徳いかほどあるぞ」と問。侍答云、「五貫三貫の間」といふ。・・・住人笑つていはく、「・・・そのゆへは、百貫の損をして五三貫の徳ある事を好

む人は、ただの狂人にことならず（〈伊〉398-6,7,10,10）

下「廿九　出家とゐのこの事」には進物の金銭に対する出家の欲深さが語られる。

（61）　此出家の重欲心をさとつて申けるは、「・・・持ちたる百貫の料足を、貴僧に奉るべしといひおき侍る」（〈伊〉465-7）

これらの話は〈エソポ〉に存しない。なお、〈ヘイケ〉では清盛から妓王の母に毎月おくられた「百石、百貫」（93-23）（98-8）に用いられている。「くわん（貫）」が〈伊曽保〉で多いのは、経費と利益という金銭の損得や金銭への欲心を扱った話を〈伊曽保〉が採用したことによる。

以上をまとめると、次のようである。

i　「しやく（尺）」が〈伊曽保〉にのみあるのは〈エソポ〉対応する話が存在しないか、存在しても表現が異なっているために出現しないものである。

ii　「くわんめ（貫目）」は〈伊曽保〉で多用され〈エソポ〉に見られない。それは金銭の争いを扱った話を〈エソポ〉が採用しなかったことによる。同様に、「くわん（貫）」が〈伊曽保〉で多いのは、経費と利益という金銭の損得や金銭への欲心を扱った話を〈伊曽保〉が採用したことによる。

3.7　〈ヘイケ〉にのみあるもの

（G）〈ヘイケ〉にのみあるものは全部で４８種類である。3作品すべてで〔時間〕〔頻度〕〔性質単一〕の意味分類に属するものが多いが、〈ヘイケ〉にのみあるものも、これらの意味分類に属するものが多い。また、〔尺度〕の意味分類に属するものが〈ヘイケ〉では〈エソポ〉〈伊曽保〉に比べてはるかに多く、それが〈ヘイケ〉にのみあるものの種類を伸ばしている。〈ヘイケ〉は「この国の風俗を知り」「日域の往時を訪ふべき書」[注8]として、ハビアンにより選ばれ、抄訳された作品である。合戦を記録するという作品の性格が（G）〈ヘイケ〉にのみあるものの属す意味分類によく反映している。

使用比率がとくに高く、５０パーミルを超えるものは、〔位階〕の「ゐ（位）」（度数１０７）、〔順序〕の「らう（郎）」（度数１３６）、〔性質単一〕の「き（騎）」（度数１７８）の3種類である。５０パーミルに近いものに〔区画〕の「でう（条）」（度数６７）がある。「ゐ（位）」は位そのものを表す場合もあるが、「三位入道」（度数２１、源頼政の呼称）のように、その位に叙された人や関係者を表す場合もある。「らう（郎）」は兄弟の中における出生の順序を示し、人物呼称として用いられる。「き（騎）」は馬に乗っている武士の数を示し、その数が軍団の規模を表している。「でう（条）」は通りや土地

そのものを表すのが本来の用法であるが、「西八条」（度数１５、平清盛の邸宅の呼称）のように、その土地にある屋敷を表したり、「七条の修理の大夫」（度数２、藤原信隆の呼称）のように、その土地に住んでいる人を表したりする用法も多く見られる。

以上をまとめると、次のようである。

ⅰ　〈ヘイケ〉にのみあるものは〔時間〕〔頻度〕〔性質単一〕〔尺度〕の意味分類に属すものが多い。〈ヘイケ〉は日本の風俗と歴史を知るという目的で選ばれ、抄訳された作品である。その作品の性格が〈ヘイケ〉にのみあるものによく反映している。

ⅱ　〈ヘイケ〉にのみあるものの中で、とくに使用比率の高いものは〔位階〕の「ゐ（位）」、〔順序〕の「らう（郎）」、〔性質単一〕の「き（騎）」、〔区画〕の「でう（条）」である。これらは人物の呼称としてよく用いられる。また、武士の数を示し、軍団の規模を表すのに用いられる。

4　おわりに

天草版『エソポのハブラス』の助数詞そのもの、及び助数詞を含む数詞に関して、国字本『伊曽保物語』・天草版『平家物語』と比較し、その特色を把握することにつとめた。まずその結果を掲示する。

３作品の比較から見る全体像

ⅰ　〈エソポ〉と〈ヘイケ〉とは室町時代末期の話し言葉で書かれた日本語教材という共通点を持っているが、〈エソポ〉は〈ヘイケ〉と比較して助数詞を含む数詞の使用が少ない。

ⅱ　助数詞を含む数詞の語彙の規模は〈伊曽保〉の方が〈エソポ〉より大きい。しかし、助数詞の種類では〈エソポ〉の方がバラエティに富んでいる。

意味による分類の観点から見た助数詞の特色

全体像

ⅰ　各作品で助数詞の種類が多いのは〔時間〕〔頻度〕〔性質単一〕の意味分類である。３作品で共通に見られる助数詞群も同様の様相を呈している。

ⅱ　〈エソポ〉〈伊曽保〉と比較して〈ヘイケ〉で多いのは〔尺度〕の意味分類である。それは〈ヘイケ〉のみに見られる助数詞群にもよく現れている。

３作品にあるもの

ⅰ　３作品で共通に見られる助数詞は、室町時代から江戸時代にかけて一般に用いられたものである。

ⅱ　「すん（寸）」は〈エソポ〉〈伊曽保〉で成句の中で、〈ヘイケ〉で実際の長さを表

す場合に用いる。寓話と軍記という作品の素材の相違が反映されている。

iii　「ひき（匹）」は〈エソポ〉〈伊曽保〉で色々な獣を数えるのに、〈ヘイケ〉で人の乗っていない馬を数えるのに用いる。寓話と軍記という作品の素材の相違が反映されている。現代の用法と比較した場合、「ひき（匹）」で表す対象の範囲が広い。

iv　「ほん（本）」は〈エソポ〉で柱・斧の柄、〈伊曽保〉で柱・植木、〈ヘイケ〉で卒塔婆・柱を対象にする。現代の用法と比較した場合、表す対象の範囲が狭い。

〈エソポ〉〈伊曽保〉にあって〈ヘイケ〉にないもの

i　〈エソポ〉〈伊曽保〉にあって〈ヘイケ〉にないもののうち〈高野本〉にある助数詞は、原拠の『平家物語』を〈ヘイケ〉に編集する際に訳出されない章段や部分にあったものである。

ii　「つき（月）」は室町末期から江戸初期にかけて「音読みの数字・（か）・つき」の形で用いられた。

iii　〈ヘイケ〉で「くち（口）」が見られない現象には、〈エソポ〉〈伊曽保〉には飲食の行為や情景がしばしば描写されるが、〈ヘイケ〉にはその描写が極めて少ないという作品の内容の相違が関係していよう。

iv　歌の曲節を数える単位の「ふし（節）」は新しい用法といえる。

v　「ばい（倍）」は〈エソポ〉〈伊曽保〉「一倍」の語形で用いられ、二倍の意味を表す。現代語の副詞的用法にとれるものもある。

〈エソポ〉〈ヘイケ〉にあって〈伊曽保〉にないもの

i　〈エソポ〉〈ヘイケ〉にあって〈伊曽保〉にないものは、〈エソポ〉の使用度数が少ない。〈エソポ〉の下巻に集中し、〈伊曽保〉に対応する話が存在しない。

ii　「か（日）」は合戦の記録という作品の性格を受け継いで〈ヘイケ〉で多用された。

〈伊曽保〉〈ヘイケ〉にあって〈エソポ〉にないもの

i　〈伊曽保〉〈ヘイケ〉にあって〈エソポ〉にないものは、〈伊曽保〉の使用度数が少ない。〈エソポ〉に対応する話が存在しない。

ii　「さう（艘）」は合戦の記録という作品の性格を受け継いで〈ヘイケ〉で多用された。

〈エソポ〉にのみあるもの

i　〈エソポ〉に助数詞の面から能の語りの素養の反映を見ることができる。

ii　〈エソポ〉にのみある助数詞は、〈伊曽保〉に対応する話が存在しないか、存在しても対応する部分の表現が異なっているために出現しないものである。

〈伊曽保〉にのみあるもの

i　「しやく（尺）」が〈伊曽保〉にのみあるのは〈エソポ〉対応する話が存在しないか、

存在しても表現が異なっているために出現しないものである。

ii　「くわんめ（貫目）」は〈伊曽保〉で多用され〈エソポ〉に見られない。それは金銭の争いを扱った話を〈エソポ〉が採用しなかったことによる。同様に、「くわん（貫）」が〈伊曽保〉で多いのは、経費と利益という金銭の損得や金銭への欲心を扱った話を〈伊曽保〉が採用したことによる。

〈ヘイケ〉にのみあるもの

i　〈ヘイケ〉にのみあるものは〔時間〕〔頻度〕〔性質単一〕〔尺度〕の意味分類に属すものが多い。〈ヘイケ〉は日本の風俗と歴史を知るという目的で選ばれ、抄訳された作品である。その作品の性格が〈ヘイケ〉にのみあるものによく反映している。

ii　〈ヘイケ〉にのみあるものの中で、とくに使用比率の高いものは〔位階〕の「ゐ（位）」、〔順序〕の「らう（郎）」、〔性質単一〕の「き（騎）」、〔区画〕の「でう（条）」である。これらは人物の呼称としてよく用いられる。また、武士の数を示し、軍団の規模を表すのに用いられる。

次に助数詞の簡略化が見られるかという点と、助数詞の使用の視点で〈エソポ〉〈伊曽保〉に相違があるかという点について述べる。

濱千代（2006）の天草版『平家物語』と『平家物語』〈高野本〉との比較では、助数詞の簡略化と作品の編集方針を分離して考察することが困難であった。今回、天草版『エソポのハブラス』・国字本『伊曽保物語』を調査の対象にしたことで、次の点が明らかになった。

①〈エソポ〉〈伊曽保〉〈ヘイケ〉すべてにあるが〈高野本〉にない助数詞はない。

②〈エソポ〉〈伊曽保〉〈ヘイケ〉すべてにないが〈高野本〉にある助数詞は３９種に及ぶ。

〈高野本〉にある助数詞３９種は次のものである。

（一）量を測る単位

①人為的に特定の単位を設定したもの・・・計１４種

〔尺度〕さと（里）、ゆじゆん（由旬）、つか（握）、せき（尺）、ふせ（伏）、ちやくしゆ（搩手）・・・６種

〔量目〕こん（斤）・・・１種

〔時間〕こく（剋）、こふ（劫）、じ（時）、てん（点）、しう（秋）、せい（歳）、しゆん（旬）・・・７種

②集合体や容器の名称を単位名としたもの・・・計２種

〔容器〕へい（瓶）、びやう（瓶）・・・2種

（二）数を数える単位

①頻度・種類・順序などを単位名としたもの・・・計5種

〔頻度〕くわい（回）、かへり（返）・・・2種

〔重なり〕ちよう（重）、かい（階）、とう（等）・・・3種

②性質・形状などを単位名としたもの・・・計18種

a　単一体を単位とする場合・・・16種

〔性質単一〕き（基）、せん（銭）、ぢく（軸）、く（句）、でふ（帖）、し（枝）、もん（文）、ふり（振）、きれ（切）、めん（面）、よ（節）、えふ（葉）、つう（通）、ちやう（張）、ぎやう（行）、ちやう（挺）

b　集合体を単位とする場合・・・2種

〔性質集合〕くだり（襲）、て（手）

このことから〈エソポ〉〈伊曽保〉の作品の規模が〈高野本〉に比べて小さいとはいえ、中世末期から江戸初期にかけて成立した3作品で助数詞が減少していると指摘できる。とくに〔時間〕〔性質単一〕の意味に分類される助数詞が減少している。

何を対象にその助数詞が用いられたかという点で、〈エソポ〉と〈伊曽保〉の助数詞を比較すると、双方に違いがあることも判明した。「かなで（奏）」「きよく（曲）」など、声に出して歌う行為に関わる単位を〈エソポ〉は多用する。〈エソポ〉に助数詞の面から能の語りの素養の反映を見ることができる。また、金銭に関わる単位を〈伊曽保〉は多用するが〈エソポ〉はそうではない。〈エソポ〉〈伊曽保〉とは共通の祖本としての文語本が存したであろうと考えられるが、〈エソポ〉の下巻に相当する部分は収録寓話の異同が大きい。その共通の祖本部分の中でも〈伊曽保〉の上十三・十五、中六の話が〈エソポ〉に存在しない。これらの話で金銭が話題になり、「くわんめ（貫目）」「くわん（貫）」のような金銭に関わる単位が現れる。〈エソポ〉は金銭の話題を採用しなかったと考える。〈エソポ〉〈伊曽保〉の助数詞に編集方法の相違が反映している。

〈注記〉

注1　宮地敦子（1972）「数詞の諸問題」（『品詞別日本文法講座　名詞・代名詞』明治書院刊行）、池上秋彦（1971）「数詞」「助数詞」の項目の解説（『日本文法大辞典』明治書院刊行）、築島裕（1965）「日本語の数詞の変遷」（『言語生活』第166号）、前田富祺（1984）「中世文学と数詞」（『武蔵野文学』32）、前田富祺（1986）「古

典の中の数詞・助数詞」(『日本語学』第５巻第８号）などを参考にした。

注２　濱千代いづみ（2006）で〈ヘイケ〉の異なり語数507語、延べ語数1371語の数値を示した。この時には「さんがねん（三が年)」「いちでうのじらう（一条の次郎)」のように一語の中に助数詞の二つ以上ある場合、助数詞ごとに区別して計量した。この方法で計量すると、〈エソポ〉の異なり語数・延べ語数は60語・152語、〈伊曽保〉は62語・223語になる。今回は一語の中に助数詞の二つ以上ある場合も、一語と見なして計量した。また、〈ヘイケ〉と〈エソポ〉の基準をそろえるための修正も加えた。これによって数値の変更が生じた。

注３　〈エソポ〉と〈ヘイケ〉は１ページあたり24行という同じ組み方で印刷し、合わせ綴じてあるので、物語の本文のページ数が作品の規模を表しているとみなせる。〈エソポ〉の物語の本文は409ページから502ページまでの94ページである。〈ヘイケ〉の本文は３ページから408ページまでの406ページである。ページ数で作品の規模を捉えると、〈エソポ〉は〈ヘイケ〉の２３．２％になる。

注４　〈エソポ〉〈伊曽保〉ともにイソップの生涯と数々の寓話とで構成されている。〈エソポ〉に載るイソップの生涯を〈伊曽保〉はすべて含むが、〈伊曽保〉の上十三～十六、中四・六・七の話は〈エソポ〉に存在しない。また、〈エソポ〉の寓話は７０話、〈伊曽保〉は６５話で、そのうち内容が共通なのは２６話である。とくに〈エソポ〉の下巻は、全４５話のうち共通なのは２話のみである。

注５　遠藤潤一（1987）は共通の「祖本の原典はSteinhöwel集のロマンス語訳本であったと考えられる」とし、天草版の編者は共通の「祖本にイソップ寓話としては異質な話が登場する辺りに差し掛かって」「ラテン語本に依拠しての編集に切り替えたのではないであろうか」とする。

注６　日葡辞書の引用は『邦訳　日葡辞書』による。以降の引用も同様である。

注７　『源氏物語語彙用例総索引』自立語篇によると、「ひとふし（一節)」は１４例である。日本古典文学大系『徒然草』では１例である。ひとつの出来事、ひとつの点という意味に解せる。

注８　〈ヘイケ〉の「読誦の人に対して書す」に「この国に来たって、天の御法を説かんとするには、この国の風俗を知り、また言葉を達すべきこと専らなり。」「言葉を学びがてらに日域の往時を訪ふべき書これ多しといへども、・・・平家物語に如くはあらじと思ひ、これを選んで」とある。

〈文献〉

濱千代いづみ（2006）「助数詞の観点による天草版『平家物語』と『平家物語』〈高野本〉との比較」　『解釈』第五十二巻、第五・六号　解釈学会発行
近藤政美・池村奈代美・濱千代いづみ（1999）『天草版平家物語語彙用例総索引』 勉誠出版発行
近藤政美・武山隆昭・池村奈代美・濱千代いづみ・近藤三佐子（1998）『平家物語〈高野本〉語彙用例総索引』（付属語篇）　勉誠社発行
大塚光信・来田隆（1999）『エソポのハブラス本文と総索引』　清文堂出版発行
横山英　監修（1975）『仮名草子伊曽保物語用語索引』　白帝社発行
大塚光信（1983）『キリシタン版エソポのハブラス私注』　臨川書店発行
森田武　校注・解説（1965）「伊曽保物語」（日本古典文学大系『仮名草子集』岩波書店発行）
中川芳雄　解説（1994）『古活字本伊曽保物語　国立国会図書館所蔵本影印』勉誠社再版発行
梶原正昭・山下宏明 校注（上―1991、下―1993）新日本古典文学大系『平家物語』上下　岩波書店発行
市古貞次　編（1973~1974）『高野本平家物語　東京大学国語研究室蔵』〈一〉～〈十二〉笠間書院発行
峰岸明（1966）「平安時代の助数詞に関する一考察（一）」　『東洋大学紀要　文学部篇』第二〇集、『平安時代古記録の国語学的研究』（1986年、東京大学出版会刊行）に再録。
遠藤潤一（1987）『邦訳二種　伊曽保物語の原典的研究　総説』風間書房発行
土井忠生・森田武・長南実　編訳（1980）『邦訳　日葡辞書』岩波書店発行
上田英代・村上征勝　ほか（1994）『源氏物語語彙用例総索引』（自立語篇）　勉誠社発行
西尾実　校注（1957）日本古典文学大系『方丈記　徒然草』　岩波書店発行
小学館国語辞典編集部（2000~2002）『日本国語大辞典　第二版』　小学館発行
室町時代語辞典編修委員会　編『時代別国語大辞典室町時代編』　三省堂発行
小林千草（2008）「『天草版平家物語』〈重衡東下り・千手〉の段と能「千手重衡」――不干ハビアンの“語り”の文体に占める本段の普遍性と特殊性――」　『近代語研究』第十四集　武蔵野書院発行